

第2章 - 1

学校園教育の充実

◆園、小、中、高等学校の増加

市制施行当時の市内の学校数は、小学校6校、中学校1校、高等学校2校(市立1・県立1)の合計9校でした。

その後、児童生徒数が年々増加してきたため、小学校も中学校も分離・新設を重ねてきました。このほか県立中学校の新設や、高等学校にあっては市立守山女子高校が私立立命館守山高校(後に中学校設置)へ移管されたこと

などの変遷もあって、2019(令和元)年度末現在の学校数は、小学校9校、中学校6校(市立4・県立1・私立1)、高等学校3校(県立2・私立1)、養護学校1校(県立1)の合計19校となっています。保育ニーズの高まりなどから、保育園・こども園・幼稚園の数は2019(令和元)年度末現在20園に増加しています。

◆特色ある学校園づくり

市立の幼稚園、小学校、中学校では本市独自の特色ある学校園づくりを進めてきました。

ようちえんまつりは市内幼稚園5歳児が一堂に集まって交流するもので、2002(平成14)年度から毎年開催してきました。2016(平成28)年度からは保育園児も加え、2018(平成30)年度で終了するまでの間、幼児の運動能力向上をはかってきました。

子ども描画展は幼児から中学生までの作品を市民ホールに展示する催しで子どもの表現力を高め、情操を育ててきました。

小学校3年生を対象としたオペラ鑑賞、4年生を対象とした佐川美術館での作品鑑賞や砂絵体験教室、5年生を対象とした芸術家による芸術体験教室

は、それぞれ本物に出会う特色ある体験学習の場です。

特別支援学級の行事として1年間学習したことを劇や音楽で発表するほたるの子学習発表会は、社会自立の基礎となる表現能力と集団参加能力を高める取り組みです。

学校給食については、自校方式が本市の特色で、1948(昭和23)年から始めました。当時の献立は主食コッペパン、副食クジラの竜田揚げなどでしたが、現在は全国の郷土料理や守山の伝統野菜・特産物をいかした料理なども盛り込んでいます。

また、近年になって中学校給食を望む声の高まりを受け、2021(令和3)年から自校方式による中学校給食を順次開始する予定です。

◆幼保一元化、就学前3年保育の実施

近年の保護者ニーズの多様化に対応して、国は幼稚園と保育所の一元化を検討し、2006(平成18)年から幼稚園的機能と保育所的機能を一体化した認定こども園制度を開始しました。

本市では市立と法人立を合わせて七つの認定こども園が開園しました。

また、近年まで幼稚園は4・5歳児を対象とする2年保育でしたが、2012(平成24)年からは3～5歳児を対象とする3年保育に拡大しました。また、一部の園では子育て支援の充実とワークライフバランスを推進するため、預かり保育を実施しています。



▲守山小学校・守山幼稚園(合築)



▲ようちえんまつり



▲子ども描画展



▲みんなでおいしく学校給食

整備を実施し、保育内容を充実するなど、取り巻く状況に呼応して役割の一体化をはかり、安心して子育てができるまちをめざしています。

伝統文化の 香りにかまち



▲JRC発祥の地顕彰碑

◆JRC活動

青少年赤十字(JRC= Junior Red Cross)には、わが国の全学校の約3分の1にあたる1万4000校余りの学校が加入しています。その目的は世界の平和と人類の福祉への貢献です。

本市の各小中学校も加入していて、青少年赤十字の実践目標「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」に向けて、学校教育のなかでさまざまな活動として取り組んできています。

なかでも守山小学校は1922(大正11)年にわが国で最初に少年赤十字団を結成した学校であり、早くから将来の国際化を見通していたといえるでしょう。JR守山駅前には少年赤十字団発祥の地顕彰碑が建立されています。

近年、自然災害の多発や社会の国際化のなかで、被災地支援や国際親善への意識が高まり、豊かな人間性、社会性、国際性の育成をめざしたJRCの理念と実



▲守山小学校のJRC活動の様子(必要な防災用品調べ)

践の意義はますます高まっています。

◆国際交流と英語教育の充実

市は英語教育にも力を入れてきました。

国際交流事業の一環として米国ハワイ州カウアイ郡の高校生との交換留学や、ミシガン州レナウイ郡との間では高校生の交換留学(現在は中断)・中学生の海外派遣等を行っています。ホー

ムステイを受け入れる地域力と、早くから英語に親しむ文化があって今日まで続けています。

また、充実した英語教育をめざして5歳児から英語に親しむハローイングリッシュプロジェクトを2012(平成24)年度から取り入れています。外国

語指導助手(ALT)の指導により幼児や児童は楽しみながら英語にふれあっています。

英語教育の推進によりグローバル化時代にはばたく子どもの育成をめざしています。

伝統文化の 学びの 香りに かまち



▲第39回全国高等学校総合文化祭(2015(平成27)年)

◆小学校少人数学級の実現

1学級の生徒数は県の基準では35人です。そのなかであって、一人ひとりの児童生徒に対してきめ細かな教育をかねてより願っていた本市は、独自の制度として小学校1・2年生1学級25人程度学級編制の実施をめざすこととしました。

少人数の学級を編制するためには市

費負担教員が学級担任となることが必要です。このため国の構造改革特区の認定を2006(平成18)年に得ました。以降毎年実施可能な範囲で少人数の学級を編制しています。2019(平成31)年現在、小学校1・2年生に加え3年生も対象にして1学級32人を上限とする学級編制を実施しています。



▲ハローイングリッシュ

◆教育環境の整備、充実

老朽化あるいは児童・生徒数の増加、また地震や暑さへの対策として、学校や体育館は必要に応じて改築や増築などの対応を行ってきました。

特に地震への備えは他の公共施設より優先着手し、2016(平成28)年にすべての校舎および体育館の耐震改修が

完了しています。

近年熱中症が心配されるなか、すべての小・中学校で普通教室などに空調設備を設置しました。また、洋式トイレの設置率が50%以上となるように整備しました。



▲少人数学級の様子

◆第39回全国高等学校総合文化祭

全国高等学校総合文化祭(総文祭)が2015(平成27)年に滋賀県で開催されました。全国の高校生が集結して美術・演劇・音楽などの芸術文化を披露する大会です。

本市は吹奏楽・器楽・百人一首の会

場となりました。

参加した高校生は、「おもてなし精神の根底は挨拶だと思った」「何カ月もかけて練習して得たものはチームワークの大切さだ」など、総文祭で多くのことを学びとりました。



▲耐震補強工事を終えた校舎

第2章 - 2

中山道守山宿とともに



▲紀貫之の和歌(市立図書館設置)



▲今宿一里塚



▲中山道守山宿街なみ景観づくり



▲東門院門前アート市

◆中山道守山宿の起こり

守山の地名は紀貫之が詠んだ和歌のなかに初めて記されます(所収:『古今和歌集』)。その後、『平治物語』や『十六夜日記』に東山道中の宿として守山が現れます。地方産業が盛んになった室町時代、守山宿での「もりやまいち」が歌人正徹の紀行文「なぐさめ

草」に記されています。

江戸時代になって守山宿は人馬の供出を補うため吉身と今宿を加宿し、朝鮮通信使や皇女和宮の宿泊地にもなり、「京発ち守山泊まり」といわれて栄えてきました。

◆中山道守山宿の復活

時は移り近年になると、車社会や都市化の影響を受けて歴史ある守山宿もかつてのにぎわいは遠いものになっていました。そのようななか、復活に向けた動きが出てきました。

一つは住民活動です。地域住民による中山道守山宿歴史文化保存会が1988(昭和63)年に結成されて中山道ウォーキングや一里塚(県指定文化財)の管理などの活動が始まりました。

二つには商業活性化の動きです。

1970(昭和45)年頃にいったん途絶えていた「もりやまいち」が1995(平成7)年に地元商業者等の力で復活したのです。

三つには中山道守山宿の街なみの景観づくりです。住宅や店舗を改築するにあたって風情ある景観を保全再生する取り組みであり、2002(平成14)年から市は補助金制度を設けて支援しています。

◆整備と活用

こうした動きに続いて、市は中心市街地活性化事業の取り組みを始めました。中山道街道文化交流館、町家うの家、にぎわい広場などを整備し、各施設でイベントが定着して一帯のにぎわいが増していきました。

東門院では門前アート市が2008(平成20)年から毎月続けられています。そのほか一里塚を一對に復元しようとの活動を始める団体が2015(平成27)年に結成され、また2017(平成29)年には守山宿周辺の名所や旧跡を楽しく学べるすごろくを地元の団体が作成・普及し、さらに中山道守山宿歴史文化保存会等が全国の中山道宿場会員の参加を得て守山宿大会を開催して

います。

東門院、一里塚はじめ中山道沿線には数多くの名所旧跡が残っています。中山道守山宿とともに、これからもまちづくりが進んでいきます。



▲中山道にかかる土橋

第2章 - 3

遺跡の整備、そして活用へ

◆全国から注目される多数の弥生遺跡

肥沃な平野が広がる野洲川流域では、古来より豊かな生活・文化を育んできました。そのため、市内には151もの遺跡が発見されています。そのなかでも服部(弥生前期)・下之郷(弥生

後期)・伊勢(弥生後期)の三つの遺跡は弥生時代の生活を知る重要な手がかりとなるもので、全国から注目されています。

◆埋蔵文化財センターがオープン

野洲川改修工事が進むなか、1974(昭和49)年に服部遺跡が発見されました。翌年からの5年間にわたる本格的な発掘調査の結果、縄文時代晩期から中世までの複合した貴重な遺跡であることが判明しました。これらの遺物や資料を保存、収蔵する施設として、国の補助を受け、1980(昭和55)年に市立埋蔵文化財センターが完成、オープンしました。その後、市内全域の遺跡の発掘調査・研究、遺物の収蔵を行い、その成果を展示・公開しています。

市立埋蔵文化財センターがオープンした4年後に友の会が発足し、現在、会員は50人以上を擁しています。主な事業として、年4回程度、県内外の史跡等を巡る見学会を実施し、多くの市民が、埋蔵文化財センターが開催している講演会に参加しています。

埋蔵文化財センターでは、春季講演会、秋季特別展、歴史入門講座(全6講)、夏休み考古学教室を開催し、『乙貞』(隔月発行)により発掘調査の成果などを紹介しています。



▲市立埋蔵文化財センター(開館当時)



▲見学会の様子



▲下之郷じいちゃんズの活動

◆下之郷史跡公園で活動している活用団体

下之郷じいちゃんズは、吉身小学校の児童がつけた団体名で、1999(平成11)年に結成されました。吉身小学校5年生の赤米栽培の体験学習を指導・支援しています。

稲と雑穀の会は、1998(平成10)年に結成され、親子米づくり体験、米と雑穀(アワ・キビなど在来品種)の栽培

など多様な活動を展開しています。

弥生織りの会は、2000(平成12)年に結成され、失われた過去の織物文化を復元し、現在にいかそうと実践しています。織物に興味・関心の高い女性をはじめ、地元の高齢者も参加しています。

◆伊勢遺跡保存会の活動

伊勢遺跡保存会は、2014(平成26)年に結成されました。会員は2019(令和元)年度現在およそ60人で、定期的に講演会(学習会)を開催したり、先行して整備された遺跡を見学するツアー

を行ったりしています。また、伊勢・阿村自治会が協力して、毎年11月に伊勢遺跡まつりを開催し、多くの地域住民や市民が参加し、にぎわっています。



▲伊勢遺跡保存会の活動



▲3重の環濠跡(下之郷遺跡)

◆水田、方形周溝墓が発見された服部遺跡 (弥生前期～中期)

野洲川改修工事が進むなか、発見された服部遺跡は、1974（昭和49）年から発掘調査を始めました。調査した結果、二つの大きな発見がありました。

一つは、それまで定説となっていた3000㎡程度の大きな区画ではなく、10～200㎡ほどのミニ水田が広がっていたことです。板や杭を使わずに土を盛り上げて畦や水路にしていまし

た。二つには、360基以上もの方形周溝墓の跡が見つかったことです。小さな墓は約5×7m、大きな墓は約15×20mもあり、中央には埋葬した穴がありました。

出土した土器や木棺などの遺物は、埋蔵文化財センターで保管されています。



▲ミニ水田(服部遺跡)

◆環濠集落だった下之郷遺跡 (弥生中期)

赤野井道の下水道工事にともない、1980(昭和55)年に発見された下之郷遺跡は、東西670m以上、南北460m以上の楕円形と推定され、面積は25万㎡以上もあり、居住部分のまわりに

9条の環濠を持つ環濠集落跡です。環濠からは多量の土器、石器、木器と銅剣などの人造物や稲穂、動物の骨、樹木や葉など自然遺物が見つかっていました。2002(平成14)年に国史跡となり

ました。

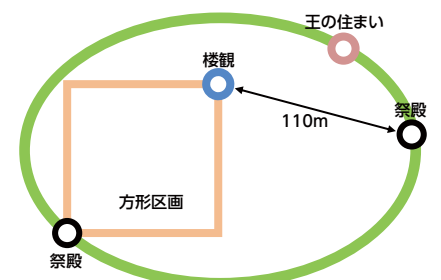
2010(平成22)年にオープンした下之郷史跡公園では、多くの市民が体験活動や遺跡まつりに参加しています。

◆「クニ」の成り立ちがわかる伊勢遺跡 (弥生後期)

伊勢遺跡は、1979(昭和54年)に発見され、広さ東西約700m、南北約450m、面積約30万㎡におよぶ大規模な集落跡です。楼観や独立棟持柱のある高床建物など、特徴的な建物群跡が見つかり、その建物の配置が円形(○)と方形(□)で表現されています。近江南部を拠点とし

て、東西に広く交流した「王」が住まう、「魏志倭人伝」に記された「クニ」の一つであると考えられます。

2012(平成24)年に国史跡となり、今後、市民が利活用し、次世代へ引き継いでいく拠点施設となるように整備していきます。



▲円形(○)と方形(□)の配置(伊勢遺跡)〈概念図〉

第2章 - 4

文化財・伝統行事(神事)の保存・継承をめざして

◆多くの文化財が残る

中山道などの陸路と琵琶湖の水運の要衝にあり、古くから水利に恵まれ穀倉地帯としても栄えてきたことから、

市内には100件もの国・県・市指定文化財等(重複を含む)があります。

◆近年、新しく指定された文化財

絹本著色聖徳太子勝鬘経講讃図

聖徳太子が35歳の時に、推古天皇の命により勝鬘経を講義する場面を描いた絵図です。室町時代の作で、小野妹子や蘇我馬子も描かれています。2016(平成28)年に市指定文化財に指定されました。(少林寺所蔵)

山本正右衛門家住宅

中山道守山宿の加宿今宿村(現今宿

町)に残る唯一の町屋建築(江戸時代末期の商家風建物)で、庭園を含めて2013(平成25)年に市指定文化財(史跡)に指定されました。

北川家住宅土蔵

三宅町の北川家住宅土蔵は、2013(平成25)年に国登録有形文化財に指定されました。土蔵造の2階建て、桁行6mの大きさで、屋根は切妻造の檜瓦葺きです。



▲絹本著色聖徳太子勝鬘経講讃図(少林寺蔵)



▲山本正右衛門家住宅



▲北川家住宅土蔵

◆日本遺産に追加認定

日本遺産(Japan Heritage)は、文化庁が地域の歴史的魅力や特色を通じてわが国の文化・伝統を語るストーリーとして認定するものです。滋賀県などが2015(平成27)年に認定を受けていた「琵琶湖とその水辺景観―祈りと暮らしの水遺産」の内容が追加され、2018(平成30)年に大庄屋諏訪家屋敷、近江のケンケト祭り長刀振りの鮒ずし切りの神事(すし切りまつり)、守山の湧水とほたる、慈眼寺の4つが追加されました。

大庄屋諏訪家屋敷の敷地には堀と舟入が残り、水運が盛んであった往時の姿をとどめています。慈眼寺の秘仏十一面観音立像は「帆柱観音」とも呼ばれ、最澄が入唐求法の旅を終えて船で帰国する際、嵐に見舞われた時に危機を救ったことから、航海安全にご利益のある仏として信仰を集めています。このほか薬師如来坐像も住吉神(海神)との関わり、水の世界の教主としての性格から水の祈りの信仰対象となっています。

◆すし切りまつり・長刀まつり

すし切りまつり(下新川神社)

鮒ずし切りの神事は、毎年5月5日午後1時から行われます。拝殿正面に座る宮司、自治会長の前で、若者二人が動作を合わせてまな板の上の鮒ずし10尾のうちの3尾を切り分けま

す。切り身は下新川神社と大水口神社に供えられたあと、来賓に振る舞われます。その後、五穀豊穰、子孫繁栄を祈願する諫鼓の舞、長刀振りが奉納され、この一連の祭礼の部分については、国の重要無形民俗文化財に指定さ



▲諏訪家主屋と書院

伝統文化の学びの場 に香りをかきまわす



▲鮎ずし切りの神事(下新川神社)



▲長刀まつり(小津神社)



▲火まつり(勝部神社)



▲古高の鼓踊り(大將軍神社)



▲豊年踊り(馬路石邊神社)



▲火まつり(住吉神社)

れ、下新川神社伝統文化保存会が祭りの継承を担っています。

長刀まつり(小津神社)

長刀まつりは、水害で社が流され、人々が鋤、鍬、棒を持ってその神霊を湖から迎え祀ったという故事に由来しています。それが伝承され、少しずつ形を変え、現在に至っていると思われます。一列になって進みながら手に持った長刀を振る踊りとその後ろに続

いてささら、笛、^{つづみ}太鼓などの楽器に合わせて音頭をとる踊りが合体したものです。

小津神社の区域は小津・玉津学区の11町で、8年ごとに祭礼当番を回しています。小津神社長刀踊保存会がその継承を担っています。下新川神社とともに国の重要無形民俗文化財に指定されました。

◆火まつり(勝部神社・住吉神社)

1月の第2土曜日(かつては8日)に勝部神社と住吉神社では火まつりが行われます。約800年前、土御門天皇のご病気が重く、その原因であるおろち(大蛇)を退治したとされ、それを模して小柴と青竹で松明(住吉神社6基、勝部神社12基)をつくり、住吉神社を頭に、勝部神社を胴になぞらえ、若者が火をつけ焼くというたいへん勇壮な奇祭です。勝部神社では松明組、住吉神社では火まつり保存会がそれぞれ運営を任せ、その継承をはかっています。

勝部では、勝部宮農クラブの手ほどきを受け、守山小学校の3年生が苗植えを、4年生が刈取り、菜種もみを行っています。守山南中学校生もボランティアで菜種殻づくりを手伝っています。2017(平成29)年に伝統行事を引き継いでいる幸津川・勝部の両自治会が応援しあおうと協定を結びました。幸津川自治会が火まつりの松明に使用する菜種殻を確保するために、菜種栽培に必要な農地を確保し、勝部自治会に貸し出すというものです。

◆古高の鼓踊り(大將軍神社)、豊年踊り(馬路石邊神社)

大將軍神社では、雨乞いをし、降雨の時に奉納したと伝えられるお礼踊りが引き継がれ、今も盛夏に鼓踊りが行われています。

毎年5月5日に豊年踊りが馬路石邊

神社で奉納され、町内でも披露されています。昭和55(1980)年に復興された伝統行事で、近江のケンケト祭りに類似し、歌詞は小津神社長刀振りと同じです。

第2章 - 5

市民による文化芸術活動

◆守山市文化協会の役割

守山市に文化協会が誕生したのは、1973(昭和48)年でした。すでに活動していた多くの文化団体が団体同士の連携をはかり、活動を通して市民の文化向上に貢献しようと結成したものです。結成当初の構成は郷土芸能、美術工芸、邦楽、洋楽、日舞、洋舞、華道、茶道、文芸、囲碁将棋、園芸、映画演劇の12部門で、70団体600人の会員でした。文化

協会の発足後は、守山市芸術祭に参加し、各団体が舞台発表や展示発表を行い研鑽の成果を発表しています。

45年を超える歴史のなかでは部門の盛衰やバレエ、ヒップホップが加わるなど変遷もありますが、2019(令和元)年現在は96団体約1300人を擁する大きな団体に成長し、守山の文化発展のために大きな役割を担っています。

◆文化芸術の拠点施設（守山市民ホール）

守山市民ホールは1986(昭和61)年、市立としては県内でも最初期に整備された文化芸術の拠点施設です。文化芸術とスポーツの振興、豊かで安らぎのある市民生活の醸成を目的に、同年発足した公益財団法人守山市文化体育振興事業団が管理委託を受け、2006(平成18)年からは指定管理者となりました。

2015(平成27)年には事業団と日本センチュリー交響楽団が「市内での音楽活動に関する協定」を締結しました。市民ホールを拠点として、クラ

シック音楽を中心とした多様な鑑賞事業を展開する一方、協定をもとに市内各所で開くまちかどコンサートや文化団体と連携したイベントなど、細やかな事業を展開しています。

地域住民の生活に即した社会教育・文化活動の拠点である7学区の公民館では公民館講座や自主教室などの活動が行われています。市民ホールも開館以来、2014(平成26)年まで、市域全体の拠点となる中央公民館を併設していました。

◆新図書館は本と人、文化が会う交流拠点

1978(昭和53)年、県下の公共図書館としては、戦後最初に開館した市立図書館は、豊かなくらしに役立つ図書館、市民が主役のまちづくりにいかせる図書館を運営方針とし、開館以来多くの市民に利用されてきました。しかし、人口増加とともに市民ニーズの多様化に加え、施設の老朽化や狭溢化等の課題も出てきました。こうして、全面改築のうえ2018(平成30)年にリニューアルオープンした新しい図書館は、従来の図書館機能を充実させるとともに、多目的室やスタジオ、ギャラ

リー、カフェ等が併設され、本や資料の利用をはじめ、講演会やコンサート、展示会等、様々な文化芸術、市民活動の拠点として、市民と本の出会いを生み出し、本を通じて人と人がつながる場となることをめざしています。

新図書館では図書館サポート隊が図書館を拠点に様々な活動を行っており、なかでも中高生サポーターたちは、自分たちでお薦め本の紹介やスタンプラリー等を企画し、ティーンズコーナー充実に向けがんばっています。



▲1973(昭和48)年9月1日の広報もりやま



▲開館当時の市民ホール



▲まちかどコンサート



▲ルシオール アート キッズフェスティバル (上はロビーコンサート、下は子どもたちの楽器体験)

文化の学びの場 伝統の香り たかしまち



▲2018(平成30)年にオープンした新図書館



▲市文化協会芸術祭・民謡(踊)大会



▲佐川美術館と連携した芸術鑑賞教室(上は平山郁夫館の鑑賞、下は平山郁夫画伯の代表作をモチーフにした砂絵)

◆守山市美術展覧会

守山市美術展覧会は菊花展覧会とともに、市制への移行を記念して1970(昭和45)年に始まりました。日本画、洋画、彫塑、工芸、書、写真の6部門で開催されています。市制施行50周年より一足早く2019(令和元)年秋に第50回展覧会を迎えました。今

後は、伝統を重んじつつ新しい世代にも受け入れられる発展的な展覧会を展開します。

また、児童生徒の豊かな感性を育む美術活動として青少年美術展覧会も開催しています。

◆ルシオールアートキッズフェスティバル

2011(平成23)年から始まった、ルシオールアートキッズフェスティバルは、県が開催するラ・フォル・ジュルネびわ湖の関連イベントとして開かれるようになりました。

「気軽に本物の芸術にふれ体験しよう」を趣旨として、市民ホール、立命

館守山中学校・高等学校などを中心としながら中心市街地や佐川美術館など各会場でクラシック音楽のコンサートやワークショップなどが行われ、市民が文化芸術に親しむ独自の一大イベントとして恒例行事になっています。

◆守山市芸術祭

守山市芸術祭は、晩夏から晩秋にかけて市文化協会を構成するグループなどが順次作品展や舞台発表などを催して参加しています。このほか、歴史ある伝統文化の一つといえる「もりやま

いち」や市内公民館の文化芸術活動が一堂に集う「自主教室のつどい」も、守山らしい文化を発信するイベントとして開催されています。

◆市と佐川美術館の連携協定

1998(平成10)年に開館した公益財団法人佐川美術館は県内外から多くの鑑賞者が訪れるとともに、風光明媚なロケーションと美しい外観で知られ市民に親しまれています。

子どもの頃から本物の芸術にふれることで豊かな感性や情操を育むことができるとして、2009(平成21)年から市内の小学4年生を対象とした芸術鑑賞教室が実施されています。

市と佐川美術館は2017(平成29)年に「連携協力に関する協定」を締結しました。協定により小学生の芸術鑑賞教室がさらに安定的に継続できるようになったほか、市民向けの美術講座が開かれたり、市民無料開放の日が設けられたりと市民全世代に向けた取り組みを推進しています。また、夏場にはトワイライトコンサートで音楽芸術にもふれることができます。

◆吹奏楽の盛んなまち

守山は吹奏楽の盛んなまちです。中学校、高校では吹奏楽部が活躍し、毎年のように滋賀県の代表校に選出され、関西吹奏楽コンクールの常連校がそろっています。吹奏楽部は市内イベントにも積極的に参加して、市民の前で演奏を披露しています。

1995(平成7)年には守山市民吹奏

楽団が結成され、吹奏楽を経験してきた高校生以上の幅広い演奏者が「市民に愛される吹奏楽団」をめざして練習を重ねています。

ルシオール アート キッズフェスティバルでは、市内の吹奏楽部と市民吹奏楽団などが一堂に集まる「プラスフェス」が開かれています。

◆地域の伝統を守る

少子高齢化の進行や市外県外で就労する市民が増えるなか、すし切りまつり(下新川神社)、長刀まつり(小津神社)、火まつり(住吉神社・勝部神社)、古高鼓踊り(大將軍神社)、豊年踊り(馬路石邊神社)など、市内各地では先人から守り続けてきた祭礼や作法

を次世代に伝えようと、市内の神社や自治会を拠点に保存会などを結成して活動する動きが活発となっています。また、自治会や学区の壁を越えて地域同士が連携したり、小中学生が祭り準備に参加するなどして伝統文化を継承するために力を尽くしています。

◆日本の伝統文化を守り伝える

担い手の高齢化が進む、日本の伝統文化を次世代に継承していくために、2003(平成15)年、文部科学省は条件を満たした講座に補助金を交付して支援する「伝統文化親子教室」の事業を実施しました。市内で第1号となったの

は、滋賀県日本文化伝承会(池坊華佑会守山支部・久遠流梧桐会(押絵)・翠玲書道研究会)主宰で、1年をかけて3種の伝統文化を学ぶものです。

その後、守山では華道、民謡、将棋など各団体も次々に認定を受け、子



▲プラスフェス(市民ホール)



▲火まつりに使う菜種がらの準備には地元の中学生も協力



▲女兒の巫女舞



▲草木千灯祭で奉納された狂言(馬路石邊神社)



▲ちまきまつり(下新川神社)

伝統文化の 学びの香り たかしまち



▲伝統文化こども教室(箏演奏)



▲伝統文化こども教室(いけ花展示会)



▲伝統文化こども教室(民謡・和太鼓)



▲おまつりごっこ(守山幼稚園)

もを対象とした「伝統文化こども教室」と位置づけて教室を立ち上げ、子どもたちが日本の伝統文化を学ぶ機会が増えました。最も多い時には16団体が認定を受けていました。2018年現在は将棋、三曲、百人一首など10団体が認定されて

います。

また、市内各地では文化財としての価値だけでなく、先人から受け継いできた祭礼や祈りの形、地域に伝わる独特の風土やまつりを大切に守っています。

2018（平成30）年に認定を受けた親子教室

| | |
|-----------------|--------------------|
| 子どもいきいき体験教室（将棋） | 守山陶芸こども教室 |
| 守山茶道こども教室 | 伝統文化子供いけ花教室 花とあそぼ |
| もりやまっ子文化教室 | 煎茶親子教室 |
| 守山子どもかるた会 | お箏っ子合奏教室 |
| びわっ子花教室 | 子どもふれあいチャレンジ教室IN守山 |

◆未来へのアクションプラン

市が2014(平成26)年に策定した「守山市文化振興アクションプラン」により、守山らしい文化芸術の特色をいかして「育む」「活かす」「創る」「伝える」「探る」をキーワードに、守山の文化振興の方向性を示し、「文化芸術で“住みやすさ日本一”」の実現をめざすとしています。

このプランにもとづいて、小学校にプロのアーティストを講師に招いた文化芸術体験授業の実施、まちなかの公共施設や商業施設を活用してプロの芸術家や若い人材の発表機会の提供、伝統文化・歴史遺産や公民館などを活用した文化芸術の発展などの施策を進めています。